

平安時代貴族住宅復元の前提についての素描

溝口 正人

1 復元という創造行為

歴史的な建築を対象とする建築史学において、過去の建築の具体像を明らかにする復元は、研究の成果として重要な部分を占めている。筆者の研究の主たるテーマとして平安時代から鎌倉時代にかけての貴族住宅建築の実態の解明があるが、当該時代の遺構が現存しない対象でもあり、やはり建築の復元は重要な研究課題のひとつである。

歴史学の基本は、直接には知り得ない過去の文化、社会、生活様式、思想などの空間的、時間的な変移の叙述を通して、未来を見据える歴史観を構築することにある。よって、現在において入手可能な情報を解釈し再構築することで、過去の人類の営みを復元する作業が歴史学の基本的な作業となる。復元という行為そのものは、建築に限定されるものではなく、広く歴史学における研究活動として普遍的な行為といえるだろう。

そして学問レベルでの過去の復元は、他者が確認可能な実証性を備えたものでなければならない。しかし時代を遡及できるタイムマシンが存在しない以上、過去の出来事のすべてを把握することは困難で、過去の完全な再現が不可能であることはいうまでもない。実証的な事

実のみでは過去の再現に限界があることも事実なのである。復元とは、抽象的な理論ではなく、具体的な事物の提示であるから、実証性の限界の先に、論理的な想像力の発露としての創造行為の余地を認めない限り、事物の具体化としての復元は成立しない。

このように、一般的に論理的かつ帰納的な結果とみられる復元にも創造性の寄与を認めざるをえない以上、復元が実証的な研究としてなされる場合には、想像力と創造性の関与する部分を明確に認識する必要があり、その前提として復元のプロセスの構造的な把握が必要となるだろう。建築の復元では、具体的な三次元空間の復元案が提示されるから、実証性の限界と創造性の関与の把握は、建築の復元の基本的な事項である。しかしながら管見の限りでは、従来の建築史研究では、この前提条件の把握については、あまり議論の対象にならなかったのではないか。以下、本稿では、このような復元の方法論的な問題点について整理し、私見を述べてみたい。

なお、歴史学における復元と復原は、語意的にも語源的にも本来同じである。しかし、歴史的な建築を対象とする建築史学に限定した場合、実際に存在する建築を修理するときに、その建築をある時代の姿にもどすことを「復原」と称し、失われた過去の建築を何らかの根拠にしたがって再び建てることを「復元」と称し、二つの行為を分けていることが多い¹⁾。以下、本稿ではこの定義に準じて議論をすすめることとしよう。

2 木綿以前のこと

柳田国男の高著『木綿以前のこと』²⁾は、日常生活における物や習慣の視点から社会の移り変わりを読み解く必要性和その困難さを示し

たエッセイ集であるが、一方で内容の如何に関わらず、そのタイトルが、衣食住に関わる歴史の研究者にとって魅力的である。なぜならば、日本人の生活習慣が、木綿が流布した室町時代後期以降に形成されたこと、室町時代以前の生活習慣は今日と大きく異なるものであったことを暗示しているからである。

「木綿以前のこと」とは、換言すれば、一見して古く遡及しうるかにみえる生活習慣が、実は時代の変遷の果てにあること、誤解を恐れずに極言すれば、民俗学的なアプローチによる歴史的な遡及の限界を示したものである。見方を変えれば、室町時代以前の生活習慣が未知の領域であり、歴史学の醍醐味といえるさまざまな想像の可能性を示唆したものとも理解できる。ただし、想像の可能性の存在は、一方で理解不能な歴史の闇が存在することを暗示している。『木綿以前のこと』に収められた「何を着ていたか」の冒頭に記された以下の文は、わかりやすい言葉で、そのことを示唆する。

「公家・武家の生活はしばしば政治の表面に顕れ、歴史として後世に伝わっていることが多いが、それでもまだ幾つもの想像しがたい部分がある。多数無名の我々の祖先の、当時としては最もありふれた毎日の慣習が、ゆかしいとは思ってもほとんどその一端をも知ることができないのはまことに致し方がない。そういう中でも衣と住とは、偶然に絵巻・画本の隅に写生かと思うようなものが見えるが、筆つきが簡素であるために材料までは確かめことがむづかしく、ただまず形の著しく今日と異なっていることに驚くばかりである。」

筆者が平安時代から鎌倉時代にかけての住宅建築の変遷に惹かれたのも、その誘惑の根底に、同様な可能性を見いだしたからであり、歴史の闇の誘惑に囚われたからに他ならない。しかし柳田が述べるように、生活習慣の具現化ともいえる住宅建築の実態も、歴史的遡及ある

いは現代的視点からの類推を排除してみると、思いのほか明らかではない。政治的な意味を持つ公家や武家といった支配者階級の住宅は、さまざまな記録に記されており、その一端を知ることができる。しかし庶民レベルに至っては、近年の考古学的な知見により、徐々に明らかになりつつあるとはいえ、近世以前は正確にはわからないというのが実態である。

実際、町家で現存最古の遺構は、墨書により慶長12年（1607）の建造とわかる奈良県五條市の栗山家住宅であり、農家では、兵庫県神戸市の箱木家住宅が、室町時代後期に遡る遺構として有名であるが、後世の改造が大きく、室町時代の実態が確定しているわけではない。このほか、農家では、やや時代が降る遺構としては古井家住宅があるが箱木家と同様な実態といえる。箱木家が有力な地侍層であったように、庶民の定義をどこに置くかは問題となろうが、室町時代の姿をそのまま伝える遺構は民家レベルではないといってよい。江戸時代前期（17世紀半ば）にまで時代を下げたとしても、該当する現存遺構は十指を越える程度で、農家の場合、改造が大きい点で室町時代に遡りうる遺構と変わらない³⁾。

では、「しばしば政治の表面に顕れ、歴史として後世に伝わっていることが多い」公家や武家の住宅の場合はどうであろうか。実は公家や武家といった支配者層の住宅であっても、室町時代以前に関しては、柳田の述べるような「まだ幾つもの想像しがたい部分がある」状態ではなく、むしろ幾つもの想像可能な部分があるが、「多くの想像しがたい部分がある」という状態にあるのが実態であろう。

現存遺構としては、銀閣寺として知られる京都の慈照寺にある東求堂が、持仏堂とはいえ住宅の範疇とすべき最も時代が古いものとなる。8代将軍足利義政の東山殿の遺構として文献史料により確定が可

能なこの東求堂の建造年代は1490年頃であるから、「木綿以前」、すなわち室町中期を遡った段階では、住宅建築に関しては現存遺構が存在しないのである。

よって支配者層の住宅であっても、建築的な実態把握は、文献史料あるいは他の建築種の類例から推察するしかないこととなる。特に以下で検討の対象とする平安時代から鎌倉時代前期の貴族住宅は、遺構が現存しないのはもちろんのこと、参照すべき社寺建築などの類例も多いとはいえない。そのため住宅史研究の究極の目的は、生活空間としての鎌倉時代以前の貴族住宅の実態解明と、住宅建築の時代的な変遷の解明にあるとはいえ、基礎的な研究の成果として、建築そのものの復元が重要な部分を占めることとなる。

3 復元研究の構造的問題

近年のめざましい発掘成果は、その時代の建築空間のイメージを一般の人々に与える上で最も有効な復元行為を促し、近代における実証的な文化財の調査と修理の手法の確立は、いかに歴史的に遡及しうるかを目標とした復元行為を至上とすることとなった。しかし、各地の遺跡で行われる建物の復元や文化財建造物の復元は、視覚的な効果の大きさの一方で妥当性の検討がない点、極論すれば推測の一案にすぎないものに貴重な予算を費やす必要性の適否など、社会的な影響の大きさから、さまざまな形で議論の俎上にあがっている。

平井聖氏が「復元という作業は、現存する遺構にかかわる場合も、全く失われてしまった建物を新たに建てる場合も、残されている史料に対する解釈、推測、そして現実との妥協のうえにたった創作、と考えている。」と明言するように⁴⁾、創作行為である以上は、復元や復元

の結果は、真実から逸脱する可能性を常に内在している。このような復原および復元の是非と問題点については、山岸常人氏の正鵠を得た論考があり⁵⁾、ここで繰り返す必要はない。

一方、先述のように、遺構が現存しない時代、地域、建築種（ビルディングタイプ）の建築の実態把握には、復元行為は不可欠であり建築史研究の基本ともいえる。もちろん平井氏や山岸氏が指摘するように、復元の妥当性の検証を可能とする学術的な透明性を確保する観点から、実証的な復元のプロセスを明確にする必要はある。また、原寸大の復元や現存遺構での復原による提示以外にも、模型やCGなど適切な成果の提示の方法が検討されるべきである。ただし、従来から問題とされた原寸建物の復元のように、建設に関わる社会の過大な負担を伴わない以上、復元行為そのものが問題視されることはほとんどないといってよい。復元行為の否定は一方で、学問の否定につながることでありかねないからである。

しかしながら復元という行為は、実証的な事実を論理的な整合性で関係づけた一種の仮説としてまとめあげる、きわめて創造的な行為である。よって、実証的な手続きを踏まえて一義的に確定されていると考えられがちな復元も、平井氏が示すような解釈、推測、現実との妥協が復元の過程で存在する。そして復元のプロセスにおいては、事例の相違を越えて、実証性の限界と創造性の余地に根ざす普遍的な問題点が内在する。

まず復元の基礎段階として、実証的であるはずの資料の解釈、そして復元に向けて資料を関係づける推測の部分で、人為の恣意性が介入する余地がある。もちろん、実証性に裏打ちされない想像の結果は妄想にすぎず議論に値するものではない。しかし創造行為の所産としての復元は、実証的論理性のみからは帰結しないある種の想像の結果で

あることは認識すべき点であろう。

建築計画学の積み重ねやさまざまな法規制、コストが、平面や外観など建築の形態に大きな影響を与えることは動かし難い。しかしこれらが、そのまま建築の形態的帰結をもたらさないことは、実際の設計行為に携わった人間であれば誰もが認識している。同様に、実証的な事実の積み重ねは、復元の普遍性を担保するものであるが、事実の積み重ねのみで復元案が導かれることも決してない。

歴史的な事象を扱う場合、歴史学であれ、建築学であれ、実証性を目指しつつも、経験則に基づく推測によるモデルあるいは仮説により理論が構築されることは、復元のみに限定されるわけではない。いわば歴史学の学問のあり方としての、この前提条件の把握は、対象となる遺物や遺構そのものが、発掘という人為的な活動の結果であるがゆえに、考古学の分野では議論の対象ともされてきた⁶⁾。

発掘による遺物や遺構そのものが何も語らないことは事実であり、一見して明確な事実であるかにみえる考古学的な知見も、極言すれば遺物や遺構をどのように解釈するかという解釈論の問題となる。考古学的な発見も、実証性に裏打ちされた上での、解釈する側の想像力の産物といえる。極論すれば「過去は帰納的抽象という手続きの結果として復元できるのではなく、論理的演繹法で事前に構築されていなければならない。」のである⁷⁾。

一方で、学術的な復元はもちろんのこと、建築の設計であれ、あるいは純粹芸術であれ、成果物はすべて個人の創造性に起因するわけではない。なぜならば創造的な活動も、意識的であれ無意識であれ、その人間が属する生活、社会、生活、文化の影響なしに成立し得ないからである。過去の創造的な活動の所産である建築を復元する場合でも、対象とする時代の生活、社会、文化の文脈を踏まえてはじめて遺

物や事実の理解が可能であり、このような理解なしには復元を導く想像力が働かない。さらに加えて、他の創造行為と同様に、復元を行う人間の経験に大きく左右されることとなるから、その人間の属する社会の影響なしに復元は成立し得ないこととなる。

つまり、個人の創造活動に帰する以上、復元行為の実像は、実証的であるかにみえながら想像性に富む、言葉をかえれば、帰納的な形式をとりながら、実はきわめて演繹的なプロセスにある。また一方で、創造性そのものが、対象とする事象の属する時代、復元を行う人間の属する時代という、ふたつの時代における歴史的、社会的な文脈から逃れることができないということとなる。復元が実証的な研究としてなされる場合には、このふたつの構造的問題点は、前提条件として明確に意識されていなければならないといえる。

4 文献史料解釈の構図

考古学的な遺物や遺構の歴史的な定位は、通時的であれ共時的であれ、現代におけるある種の文脈に基づいた解釈と推測のうえに成り立つ。遺構や遺物のみに頼らざるを得ない先史時代については、「過去は現在を通じてのみ知ることができる。」のであり、何らかの形で現在入手可能な情報を使わない限り過去を知ることができない⁸⁾。よって遺構や遺物の解釈には、基づくべき文脈の実証性と論理性が本来は強く求められる。このような論理的な想像力が停止された場合にいかなる状況が出来るかは、学会に衝撃を与えた旧石器時代の考古学的な発見のねつ造問題が明確に示した。

これに対し、文字・絵画資料が存在する歴史時代は、先史時代に比べれば、解釈の恣意性からは遠い位置にあると一般的には考えられ

る。特に考察の対象と同時代の文献資料は、基本的に時代的な経過を経た解釈が入る余地がない一次史料である。そのため考古学者からみれば、歴史学者（文献史学者）は「文献史料に記録されているような人間の思考に直接接近できる術」を持つと考えられている⁹⁾。

確かに歴史時代においては、記述そのものは一次史料として動かし難い文献資料が存在する。加えて、制作年代と描かれた史実の年代との齟齬が想定され、描写内容や同時代性に疑問を挟む余地があるものの、視覚的な情報量が豊富な絵画資料が存在する¹⁰⁾。これら時代的に定位される複数の資料の比較検討によって、文献であれ絵画であれ「資料」は歴史的に客観化された「史料」となる。そしてこれら史料を用いて、実証的かつ客観化された仮説の構築が歴史時代では可能と考えられる。

しかしながら、一見して客観的な史実であるかにみえる文献史料も、読みとる側の経験則に基づく想像力と読解にあたっての仮説なしでは解釈が不可能である点で、実は考古学的な遺構や遺物と何ら変わるところがない。文献史料は、あくまでも文字が集積したテキストであり、そのままでは何も語ってはくれない。解釈があって初めて記述が意味を持つことは、あえて述べるまでもないだろう。

実際、何の予備知識もなければ、文献史料に記された内容を、記述のまま理解することは基本的に不可能である。世界的に有名な源氏物語をテキストのまま理解できる人間は、現代ではありえない。よって、一般的には一義的に帰結すると考えられる一次史料としての文献史料の解釈も、解釈する側の学問的構造と方法論的構造の把握に大きく左右されることとなる。

手段であるはずの遺物や遺構の分析が目的化しているかにみえる日本の考古学の学問的な現状を問題視する安斎氏は、以下のように述

べ、あるべき考古学の学問的構造を図示する（図－1）¹¹⁾。

「考古学者は、過去の人間が残した遺跡を発掘することによって遺構・遺物を見つけ出し、そのコンテキストを観察・記録し、発掘資料を整理・分析することを通じて、経験的に物事の時間的変化の法則を見つけ出す。更にまた、現代文化や現代社会に関する研究諸成果に依拠して、直接には観察できない人間の過去の文化・社会・生活様式・行動・思想等の空間的変異や時間的変化についてのモデルを理論的に組み立て、そして考古資料を使ってその実態を検証する。この帰納的かつ演繹的实践過程を、さらに未来を見据える世界観・歴史意識に則して弁証法的に止揚することによって、考古学者は無文字社会の歴史を再構成することを最終目標としている。」

安斎氏は、考古学には資料解釈の根拠となる経験則、文脈の理解を

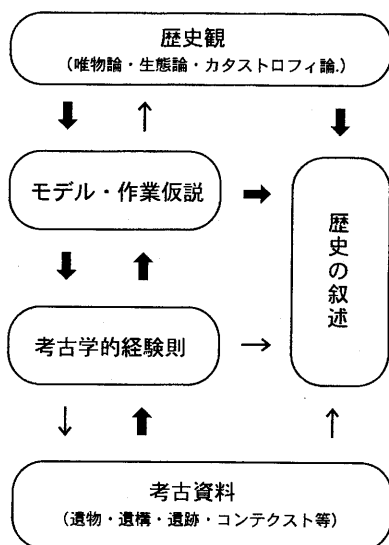


図1 無文字社会の歴史（先史）構築の全体的構図：安斎による

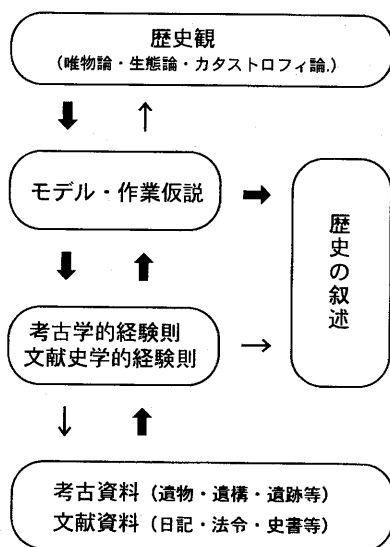


図2 歴史学（文献史学＋考古学）の学問的構図

可能とする仮説、仮説を構築する根元ともいうべき歴史観の存在が不可欠であり、目的とする歴史の叙述もこれらの相互の実践過程の中でなされるものとする。そしてここに示された考古学の学問的構造は、そのまま「考古資料」を「文献資料」、「考古学的経験則」を「文献史的経験則」に読み替えれば、文献史学においてもあてはめることができ、そのまま歴史学の構造的な理解に援用することができるだろう。

ただしこの構造モデルにも問題がないわけではない。まず第一に、歴史の叙述はモデル・作業仮説をもとにした思考的な実践の結果に他ならず、抽象的な概念としての歴史観そのものが、直接、歴史の叙述に結実するとは考えにくい。次に先述の通り、考古資料であれ文献資料であれ、資料はそのままでは何も語らないのであり、直接的に歴史の叙述に作用するわけではない。よってこの関係を受け入れるなら、構造としてはむしろ図-2のように把握すべきであろう。

さらに敷衍させるならば、さまざまな知的活動の所産は、その領域を成立させる世界観のもと、同様な構造を持っているとみることができよう。つまり学問の構造は、部分から全体まで、相似な構造のきわめてフラクタルな特性を持っているとみることができることとなる。そして、建築の復元に必須である文献史料の解釈も、歴史学と同様に経験則、仮説、歴史観相互の関係で捉えられるから、同様な構図が想定される。

5 史料解釈という翻訳作業

安易なアナロジーは慎むべきであるが、議論の所在を明確にするために、問題とすべき文献史料の解釈をコンピュータ環境にたとえて論

じることとしよう。史料解釈は言い換えれば翻訳作業であるから、経験則を辞書、必要とされる仮説は翻訳を目的としたアプリケーションソフト、歴史観をオペレーションソフト (OS) に見立てるとわかりやすい (図-3)。

一般的に翻訳には、テキストに基づいた逐語訳もあれば、文意に基づいて再構成した意識などさまざまな態様がある。また読者をどこに設定するかで、訳文の形式も、語彙も異なるだろう。このように目的によって、必要とされる翻訳の態様、形式、語彙は異なることが想定される。

文献史料の解釈においても、歴史的な対象によって扱う学問分野や時代は異なるから、同一の文献史料でも、解釈にあたっては専門領域の相違に対応して、辞書としての経験則は任意に拡張される。つまり経験則としての辞書は異なることとなる。さらに実証性に基づく読解

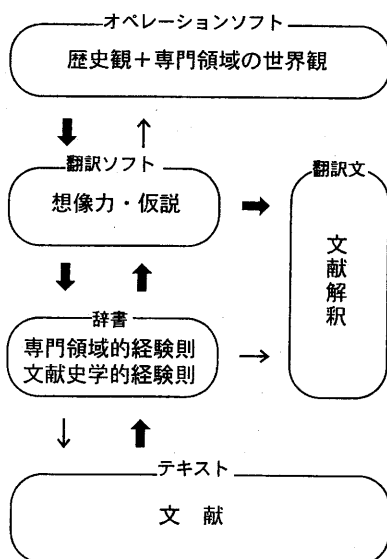


図3 文献解釈の方法論的構図

を目的としたアプリケーションソフトとしての想像力や仮説は、翻訳の目的に応じて特化するから、その方向性によって相違する場合が珍しくない。またここで必要とされる OS は、一般的な歴史観とともに専門領域の世界観 (建築学の場合でみれば建築観) も影響するから、対象の学問分野や時代に応じて相違するだろう。

ただし歴史観や専門領域の世界観については、研究者相互の相違が存在しないわけではないが、

同じ学問分野や時代、つまり専門史レベルでは「通説」として共有されている場合が多い。むしろ通説の存在は学問には不可欠であり、この通説の書き換えこそが、研究者の学問的な動機になっているともいえる。逆説的であるが、絶えず検証され書き換えられることに通説の存在意義があり、それなしに学問観あるいは学説の進歩はありえないこととなる。

また歴史学であれ他の学問であれ、通説の書き換えには、多分野の研究の進展が参照されることとなる。なぜなら特定の学問の定位には、学問分野間での相違は強く意識されなければならないからである。歴史学において、時代別あるいは分野別の研究史が成立するのは、このような時代間、分野間の共通性と相違があるからに他ならない。

いま文献史料の解釈において必要となる OS は、前述の通り、社会全般の経時的な変遷を捉えた歴史観と専門領域の世界観にまたがる論理、あるいは見通しである。建築を対象とした場合、歴史観が直接建築観に影響を及ぼすことは、イデオロギーが社会を支配した時代ならばいざ知らず現代では想定しにくいし、共産主義社会における建築のデザインをみるまでもなく、影響を論証することも難しい。一方で建築観が歴史観に直接作用することも想定しくく、作用したとしても限定的なものとなるだろう。

つまり歴史観と専門領域の世界観との直接的な影響関係は一般的に少ないこととなるから、歴史的な事象を対象とする場合、両者をつなぐ専門史の領域を介在して相互に関係づけられる場合が多いだろう。よって専門史観、建築学の分野における建築史観は、文献史料の解釈における OS の重要な位置を占めることとなる。また専門領域の歴史の叙述を目的とした学問分野としての専門史は、歴史観と専門領域

の世界観との相関から形成される（図－４）。

そして専門史観は、関係する学問領域の双方で解読可能な論理的世界でなければならないから、歴史学と専門領域それぞれの世界観に内包され、それぞれの領域を越えるものではない。つまり限定された学問領域の原則として、関係する領域の交わりとして存在することとなる（図－５）。

ところが、文献史料の解釈は一義的なものではなく、単独の世界観において解釈不可能な事象も含むから、文献史料の解釈において求められる OS は、異なる世界観に基づく解釈の可能性が想定され、検証され得る構造を持っていなければならない。よって、それは対象領域での学問的な実証性を超える部分、歴史と専門領域、二つの世界観相互で交わることのない相違する部分を包含した大系であることが求められることとなる。その全体像は、おのずと専門史観を越えたものとなるだろう（図－５）。

いま OS として必要不可欠で、かつ専門史観を超える部分は、該当する専門史観からみれば想像の範疇になり、実証性に抵触する部分でもある。それはまた一方で、辞書としての経験則と同様に、常に拡張

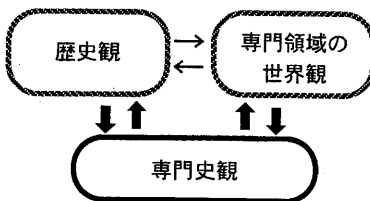


図4 歴史観、専門領域の世界観との関係からみた専門史観の形成過程

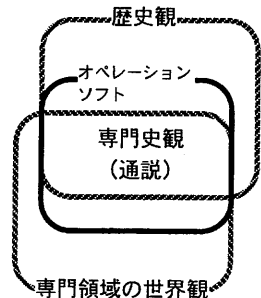


図5 文献解釈におけるオペレーションソフトと専門史観の関係

がなされるオープンエンドな領域である。そしてこのような、相互の世界観の論理性を越える越境、あるいは領域侵犯ともいえる行為には、規制の枠組みを越える創造性が不可欠と考えられるが、その妥当性を保証するものが、下位に位置する想像力あるいは仮説の有効性ということとなるだろう。

史料解釈に必要な想像力あるいは仮説は、翻訳のアプリケーションソフトに見立てられるように、その差異あるいは可否は、目的に応じた機能性や確実性、作業効率といった性能、人的には技術レベルの問題に帰結される。その場合、まず第一には、翻訳の前提となる辞書の可否が問題となるだろう。対象によって、それぞれの語に対応したさまざまな語意があるから、解釈に必要な辞書としての経験則は、集録された語彙数と分野の広がりによって左右されることになる。

建築の復元という目的に関する文献史料の解釈では、文献史学的な語彙はもちろんのこと、建築に関する語彙を読み解く知識も要求される。例えば、平安時代の文献にみられる「寝殿」とは、一般的な語義として「貴族の住宅における中心殿舎」ということになるが、建築的な記述を把握するためには、平面形態が語義として必要となる。

つまり辞書を引いた人間なら誰もが認識しているように、単語と語意は一対一対応ではないから、翻訳では複数の語義から適切な事例を選択しなければならない。基本的に逐語訳が尊重されるべきものであるが、逐語訳とはいえ機械的に導かれるものではない点はあえて力説する必要はないだろう。なぜなら単語に該当する意味を当てはめる作業は、一見して極めて恣意的と思える文脈の解釈に基づかなければ不可能だからである。よって文献史料の解釈においては、辞書の可否以上に、語意の選択に最も影響する想像力の産物としての仮説の有効性と妥当性が問われることとなる（図-3）。

ただし繰り返し述べるように、経験則、仮説および歴史観は、相互が全く独立して成立するわけではなく、相互に帰納的かつ演繹的な関係にある。例えば、前出「寝殿」の語義に必要な建築の実態を把握しようとしても遺構は現存しないから、史料を基にした仮説としての復元案が語義として提示されることとなる。つまり蓄積された経験則により仮説は導かれるが、逆に仮説により経験則は評価、修正される。さらにいえば、仮説を統辞的に構築することによって歴史観は生成されると考えられるが、一方で仮説の構築には、方向性を決定する歴史観の存在は不可欠となる。

つまり、歴史学あるいは文献史料の解釈は、形式としては、資料から導かれた経験則の蓄積により構築される帰納的な形態をとりながら、構造的には、経験則、仮説および歴史観の相互が帰納的かつ演繹的な関係にある。むしろ目的とする歴史の叙述、史料解釈は、仮説に基づく演繹的な実践として展開されるのである。以上の構造的な理解を認めるならば、翻訳作業としての文献史料の解釈においては、翻訳ソフトとしての仮説の存在がもっとも意識され重要視されなければならないはずである。

6 復元において文献史料をどのように読むべきか

以上のような文献史料解釈の構造的把握と、仮説の重要性の認識は、復元という行為において不可避となるが、実際の研究活動において議論の対象となることは少ない。議論を潜在化させてしまう最大の原因は、文献史料の解釈のような、研究者の自然発生的な問題意識により開始される研究活動では、このような経験則から歴史観への帰納的な収斂と、解釈における歴史観から経験則への演繹的な展開という

論理構築の往復運動が、無意識に行われている点にある。そしてそれは自国語の修得過程と類似した構図でもある。

外国語の体系だった修得には、まず語彙数が目標としてあげられ、自国語との比較から構文を修得し、文化的な背景の理解により文脈の把握が可能となる。ところが自国語のように自然発生的に修得が先行する場合、無意識に語彙数や語意が更新されて文脈の理解力は向上するから、おそらく語彙数や構文、背景となる文化等を自覚し検証する機会はほとんどない。

また日常的な言語の修得あるいは解釈においては、語彙の豊富さは解釈の質を決定する必須の言語能力とみなされることが多く、文章全体の構文の妥当性、論理性が特別に意識されることはないだろう。しかし、論理的な記述や正確な意味の伝達過程のためには、語彙が豊富であるかどうかは十分条件として作用はするが必須ではない。むしろ文意を示す構文の妥当性、論理的な明快さが必須条件となる。

文献史料の解釈においても同様に、目的意識の明確な歴史観の修正には分野や研究者間の差異が意識される一方、解釈に必要な経験則の蓄積と仮説の構築と更新は、自国語の習得と同様に無意識になされ、経験則と仮説の実証性や妥当性が意識されることはないといつてよい。また、経験則の蓄積が解釈の妥当性を保証するとみなされ、多くの事例を参照することのみが正確な解釈に帰結するとするような、経験主義ともいえるべき方法論が重要視される傾向にある。

歴史観の相違や通説の書き換えは、しばしば歴史的な研究での議論の対象となり、また研究分野の細分化とともに事例研究の蓄積や歴史的述語の語意の定義が研究対象となる。一方で、中間に位置する仮説の理論的な構築作業とその妥当性の検証、あるいは理論的な構築の必要性そのものが検討されることは少ないのは、帰納的に解釈が導かれ

るというような、事実誤認とも思える前提によって、無意識に仮説が形成され、解釈に適用されているからに他ならない。しかし復元が演繹的な実践である以上、文献史料の解釈においても、中位に位置する想像力、仮説の論理的構築が必須なのである。

議論を建築の復元に戻そう。平井氏の指摘にあるように、歴史的な建築の復元が、実証的論理性のみからは帰結しないある種の創作の結果であることは間違いない。しかし実証的な論理性を求める以上、文献史料の解釈と同様に、歴史学と相似の関係にある体系的な構造が、建築の復元にも適用されることとなる（図－6）。

この場合、分析の対象とするテキストは、遺構や絵画、考古資料といった建築の具体像に直接反映される建築的資料、および文献史料とみることができる。ただし建築遺構が現存しない場合は、文献史料が一次史料となる。また翻訳ソフトに該当するものとして、まず対象とする建築種の典型像あるいは標準形が想定され、その時間的変化、社会的変位、空間的変異による建築の変化の法則性が設定される。法則性の具体像としては、建築のバリエーションが想定されることとなるだろう。そして復元にあたっては、中位に位置する典型像と変化の法則性が明示される必要がある。

一般的に典型像が提示される場合、形式としては、史料から導かれた帰納的な形態で復元案として提示され、さらに変化の法則は、蓄積された復元案の相関の分析から導かれた形で示される。よって典型像そのものは事前に準備されているものではなく、経験則から帰納的に導かれると考えられがちである（図－7（1））。

しかしながら復元が演繹的な実践である以上、典型像は、経験則からの演繹的展開により事前に導かれていなければならない（図－7（2））。考古学に限らず「過去は帰納的抽象という手続きの結果として

復元できるのではなく、論理的演繹法で事前に構築されていなければならない。」のであり、平安、鎌倉時代の貴族住宅の建築的な実態の復元が目標となれば、江戸時代に提示されて以来、一般的に認知されている住宅様式としての「寝殿造」の典型像の提示とその時代的な変移が、文献史料の解釈においてもあらかじめ想定されていなければならない。

このような典型像が事前に準備されているという前提は、建築の復元に限った場合、前述のような復元案の蓄積が先行するような記述の形式から、意識されることはほとんどないといつてよいのではないだろうか。例えば、木造軸組構造である日本建築において建築の基準寸法である柱間寸法の設定といった復元の基本事項が、議論の対象とならない点も、実は、無意識に仮説が形成され、無批判に適用されてい

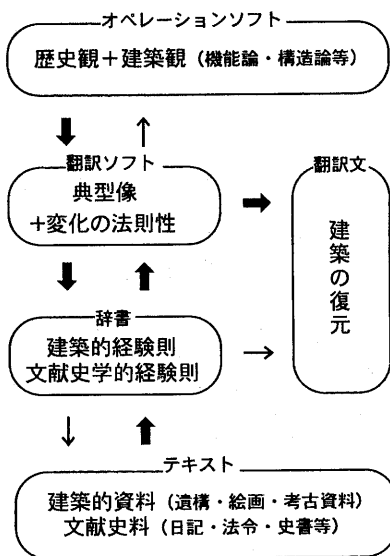


図6 建築史および復元の方法論的構図

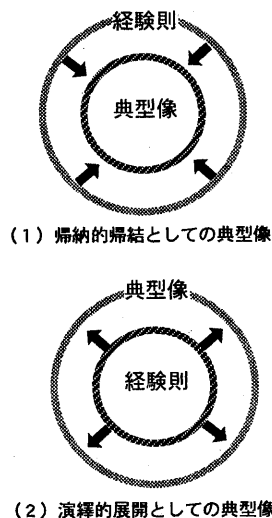


図7 復元における典型像と経験側の関係

るからに他ならないといえるだろう。

このような建築の復元研究の問題点は、詳細な事例検討を提示し論証すべきであるが、紙面の余裕もない。以上に述べた問題意識に基づく文献史料解釈と復元の実践としての事例的な研究については、別稿に詳述しているので、ここでは触れないこととしたい¹²⁾。しかし、文献史料を解釈するにあたって、専門史観に限定されない想像力が必要であることは、改めて確認しておきたい。

佐原真氏は、ものそのものに恣意性が関与しないという考古学の立場から、文献資料は「書いてあることをそのまま正しいと受け取ることができる」とは限らないから「書いてあることが正しいかどうか、十分に検討してから使わなければなりません。」とする¹³⁾。

佐原氏が指摘するように、文献資料はそのままでは利用できず、学術的な資料批判を経た史料でなければならないが、一次史料の場合、むしろ正しいかどうかではなく、どのように解釈するかが問題となる。

平安時代貴族住宅の建築規模の実態把握を目的とした場合、一次史料としての文献の記述の重要性は言うまでもない。よって「狭い」と記述された建物が、記述者にとって狭いと認識されたことは事実である。しかし、他の事例と比較して規模が小さかったために狭いと記述されたのか、あるいは記述者のある種の価値観から導かれた判断であるかは、検討されなければならない。

つまり、「記述されたもの」としてのテキストは、記述者の認識として同時代性の観点からは事実と位置づけられるであろうが、記述者の価値観、あるいは世界観を背景とした主観そのものである。よって記述の対象の事実として、どこまで共時的な事実となりうるかは、解釈という翻訳作業の適否によることとなる。

その場合、前提として、典型像と変化の法則という先入観が必要となることは、以上の構造的、方法論的な理解からみて明確に留意されるべきであろう。客観性が重要視されるあまり、実証的な復元においては、前提として想像や先入観を問題視し、排除すべきとする議論は、一見では正しいかにみえる。しかし問題とされるべきは先入観や想像の妥当性であり、先入観の有無ではない。平安時代貴族住宅の復元の前提は、よるべき先入観の存在を認識し、客観的に明示することなのである。

註 記

本稿は、日本学術振興会科学研究費基盤（C）「平安時代貴族住宅の建築規模復元に関する基礎研究」（代表 溝口正人）による研究成果の一部である。

- 1) この定義は、文化庁で使用する通例に従ったものである。語彙の定義については、藤井恵介「保存一言葉と内容」『建築雑誌』1346号、1993.8、p59。および注5) 山岸論文参照。ただし、この使い分けは必ずしも定着したものではない。注4) 平井論文では「復原」で統一している。
- 2) 昭和14年刊、本稿のテキストは、筑摩文庫版『柳田国男全集』第17巻、1990.6刊、を底本とした。
- 3) たとえば貞応2年（1653）年建替の記録が残る愛知県弥富町の服部家住宅は、文献史料により建造が確認される農家建築の最も古い事例となるが、現在の構成は後世の改変が大きく、建造当初の平面を復原することは不可能である。
- 4) 平井聖「『保存・修復・復元のフィロソフィー』を読んで」『建築雑誌』1352号、1994.1、p64
- 5) 山岸常人「文化財「復原」無用論－歴史学研究の視点から－」『建築史学』23号1994.9、pp92－107参照。

- 6) 例えば、渡辺仁「土俗考古学の勧め」(安斎正人編『縄文式生活構造・土俗考古学からのアプローチ』同成社1998、pp 2-23) 参照
- 7) 安斎正人『理論考古学』柏書房1994、p15。なお、安斎氏が同書で述べる考古学の学問的な構図は、日本の考古学で共有されているものではない。
- 8) 谷正和「過去と現在の接点—考古解釈と民族誌情報—」民族考古学研究会編『民族考古学序説』1998、pp208-225。参照。
- 9) 注7) 同書 p14
- 10) 小泉和子、玉井哲雄、黒田日出男編『絵巻物の建築を読む』東京大学出版会1996が、絵画史料の問題点と可能性を取り上げた論考としてあげられる。
- 11) 注7) 同書 p12~13
- 12) 拙稿「院御所の殿舎規模に関する基礎的研究」—白河上皇御所六条殿と鳥羽南殿の寝殿造を事例として—」名古屋造形芸術短期大学研究紀要、第16号、1993. 3、同「西六条殿寝殿と五条東洞院西面殿舎の殿舎規模について—柱間寸法からみた院政期貴族住宅の殿舎規模に関する研究(その1)—」建築史学、22号、1994.3、同「閑院における殿舎の柱間寸法」日本建築学会東海支部研究報告集、第38号、2000.2、同「六条堀河殿寝殿の平面構成について」日本建築学会東海支部研究報告集、第40号、2002.2参照
- 13) 佐原真「喜びと悲しみの学問」『AERA Mook 考古学がわかる。』朝日新聞社1997.6、p 6 参照